

○平成14年度海外派遣研修

「シドニー大学保健学部における診療放射線技師教育の実践」

放射線技術科学科 助手 鹿野 直人

○期 間 平成15年 1月30日～ 2月 7日(9日間)

○研修先 オーストラリア, シドニー,
シドニー大学保健学部放射線学科 (核医学コース)

1. 研修の目的

茨城県立医療大学保健医療学部における診療放射線技師養成のための教育・放射線技術科学分野の研究および付属病院での臨床業務を行っている立場を踏まえ、シドニー大学で行われている学部・大学院の放射線技師教育について研修し、その成果を本学での教育・研究・診療業務の向上に資することを目的とした。

2. 研修の概要

シドニー大学保健学部における診療放射線技師養成機関について、大学及び大学院における学生実験・学生実習・講義等の教育システムに関する研修を行った。

年 月 日	訪 問 先	研 修 内 容
平成15年 1月30日(木)	成田空港発 ～ シドニー空港発	
平成15年 1月31日(金)	シドニー大学	シドニー大学で研修打ち合わせ等
平成15年 2月 1日(土) 平成15年 2月 2日(日)	シドニー大学構内(キャンパーダウ ンキャンパス)	シドニー大学キャンパス見学等 保健学部以外の学部等の見学を 行った。
平成15年 2月 3日(月)～ 平成15年 2月 6日(木)	シドニー大学保健学部放射線学科 (カンバーランドキャンパス)	① カンバーランドキャンパス内の 見学を行った。 ② 核医学施設で、核医学技師か ら施設及び実験実習に関する 説明及び研修を受けた。 ③ 治療施設で放射線治療技師 による説明を受けた。 ④ 診断施設で診断放射線画像 技師による説明を受けた。 ⑤ 教室その他における見学研修 を行った。 ⑥ 核医検査技術学領域の教育 法研修等に関して日本の教育 制度内容について説明し、オ ーストラリアのものと比較検討 したのち意見交換した。
平成15年 2月 7日(金)	シドニー空港発 ～ 成田空港着	

3. まとめ

オーストラリアは、元イギリス領であるという歴史的経緯から、保健・医療の分野でもイギリスの影響を強く受けて来た。オーストラリアでは、イギリスと同様に、診療放射線技師教育は看護教育から発祥分化したものである。このため女性の技師が多数を占める。資格取得のための制度としては、我が国の様に、専門学校から大学までの様々な制度による教育を受けたのち国家試験により資格を得るものではなく、3年間の課程を卒業することによって学士の称号と放射線技師仮免許が得られる大学教育に一本化されている。1年間の指定病院での臨床経験を経てフルな免許が取得できる。

オーストラリアに於ける診療放射線技師免許は、我が国のものと異なり、専門領域によってDiagnostic Radiographer（診断放射線画像技師）、Nuclear Medicine Technologist（核医学技師）、Radiotherapy Technologist（放射線治療技師）、Diagnostic Sonographer（診断超音波画像技師）の4つに分かれていて、日本の様に他の専門領域の業務は行えない。核医学分野の場合、特筆すべき点として、患者への放射性医薬品の注射は、核医学技師が行うことができる。大学院では、修士課程・博士課程の両方を設置し研究指導を行っている。1988年に設立されたシドニー大学保健学部放射線学科では、診断放射線画像技師と核医学技師の養成コースで診断超音波画像も教え、診断超音波画像の専門コースは、大学院で設置されていた。イギリスの大学と同様に学部卒業者を対象に優等コースが4年目に設置されている。以下、核医学領域に関して報告する。

核医学領域に関しては、標識の方法や、撮像方法は、実験・実習で実際に経験できる他、学科のホームページに掲載されている実習用プログラムで手順当をシミュレーションできるような工夫がされている。古い教育用のシンチカメラが2システム（うち一つはSPECT対応）あり、実際に学生が寝台にのったり、ファントムを用いた実験で撮像や画像処理をしたりすることが可能だ。非密封放射能の使用施設は、日本に比較して非常に簡素で、土足のまま管理区域内に出入りできるのは驚きである。室内には、液体シンチレーションカウンタ、オートウエル型ガンマカウンタ、などの計測機器の他、放射性医薬品のコールドキットを使って標識ができる様な器具類が揃えてあり、臨床で行う基本的な事項を習得できる。

学部入学に際しては、高等学校で生物・物理・化学のうち2科目と数学の単位を習得していることが前提となっている。所謂楔型のカリキュラムで専門基礎科目は1学年から履修するが、教養の文科系の科目は設置されていないようである。全体として教育内容は、実践型の技師教育で、臨床現場の技師を養成するという目的及び理念に根ざしたカリキュラムになっている。例えば、更には放射線計測機器のエレクトロニクスなどは殆ど教えないが、撮像法や患者への対応方法がきめ細かに行われている等、日本における技師教育の「どちらかと言えば基礎重視型」とは大きく異なる。実習病院との連携が強く実習期間は長い。本学の実験・実習機器及び施設は、格段に整ってはいるが、むしろ即戦力になる技師を養成するためには、学内で実験すよりも、シドニー大学のように患者を目の前にした臨床現場を更に長時間経験させるようなオン・ジョブ・トレーニング型の実習を実習病院と一体となって実践することが効果的と考えられる。

オーストラリアの放射線医療分野では、上に述べた放射線技師の他、放射線科医・医学物理士などの資格によって仕事が分業化されており、それぞれがプロフェッショナルとしての意識を持ってこの領域の教育・研究・臨床を支えていた。今回の海外派遣研修は、短い研修期間ではあったが、報告者は、多くの刺激を受けて帰国した。また、オーストラリアでのトップレベルの技師たちと交流を持つことができたことも、今後の本学における教育・研究・臨床等実践を行う上で有意義であったと考えている。付属病院を含めた本学の施設設備を教育に如何に生かすかを、スタッフの一人として今後、考えていきたいと思う。